

どこか近くのお寺で 雨宿りでもしていればよいのです
わたしには、「死後に本当の人生が始まる」とは、とても思えなかった。しかし愚光さんは、本気でそう考えていたふしがある。そこが不思議。

犬棒カルタ

犬も歩けば棒に当たる 当たって碎ける心地よさ
自らをノラ公と称した。ところが或る日、「上宮寺の住職に首輪をつけられてしまった」。人工透析を受けながら、早朝6時からの百日晨朝に休まず通った。

しかし、長い闘病生活の間には弱音を吐くこともあった。「いままで何のために仏法聞いてきたんだ！」と鷲元さんに一喝された。そんな時は、珍しくしょげ込んでいた。わたしはそこに、愚光さんの人間らしさをみて嬉しかった。

謎めいた人

昨年の暮れ、「川島さん、固まるってどういうことか知ってっけ？」と突然携帯電話をかけてきた。「固くなることでしょ」と答えると、「ところが、なかなか固まらないんだよ。何時まで経っても固まんねえ。この野郎、早く固まれ！って言いたくなるんだ。」という。

心配になって翌日自在庵を訪ねると、「これから鰻を食べに行こう」と言い出した。鰻重を前に愚光さんが言った。「川島さん、最後の晚餐て、知ってっけ？」「レオナルド・ダ・ヴィンチのあれでしょ」「いや、これが最後の晚餐だよ」

愚光さんがこの世を去ったのは、それから一か月後のことだった。仏道の核心を、身を以て示していただいた。ありがとう、愚光さん。最後に献句を一つ。

のら公はいずこに在りや雨上がり

『法友』川崎さん

藤井 智

川崎さんとの出遇いは、鷲元さん（上宮寺前住職）に庭の植木を貰って欲しいという方がいるという話で、日立市のお宅にお邪魔したのがきっかけでした。

話をしていると、玄関に『不自由の中の自在庵』と掲げ、鍵はかけず、誰がいつ入ってもいいところなのだということです。「不用心じゃないですか」と言うと、「ご本尊と家自体持っていかれなかったらそれでいい」と笑っていました。「変わっているけれど面白い方だなあ」というのが最初の印象でした。それから、時々遊びに行き話をする仲に成りました。

ある時「本を持って行ってほしい」と言うので、選んでいると、「全部持って行きな」と言い、「そんなに読み切れないよ」と言うと、「藤井さんは坊さんなのに、自分の事しか考えない人だな」と言うのです。「お寺に置いておけばだれか読む人が居るかもしれない。持っていけ、持っていけ」と強引に押し付けられ、軽トラ二台分山積みで頂いてきました。

寺に戻ると妻である坊守が「自分で求めた本も整理できないのにどうするんだ」と怒っておりました。立つ瀬がないと言うのはこういうことだと、独り言を言いながら整理していた事を思い出します。